

リコはおかあさん

間所ひさこ作 山本まつ子絵



の創作童話

リコはおかあさん

間所ひさこ・作

山本まつ子・絵



ポプラ社の創作童話10

リコはおかあさん

間所ひさこ著

ポプラ社 昭和44年 120p 22cm

N.D.C. 913



検印省略

リコはおかあさん

定価 450円

1969年5月15日発行©

著者 間所^{まどころ}ひさこ

発行者 久保田忠夫

発行所 株式会社 ポプラ社

東京都新宿区須賀町5

振替 東京 149271

印刷所 新興印刷製本株式会社

製本所 富士製本株式会社

(落丁・乱丁本はいつでもおとりかえます)

・まえがき・

夏休み、すき？ それとも、きらい？

あなたは、どっちかしら。

——夏休み、はんたい。ないほうがいい。

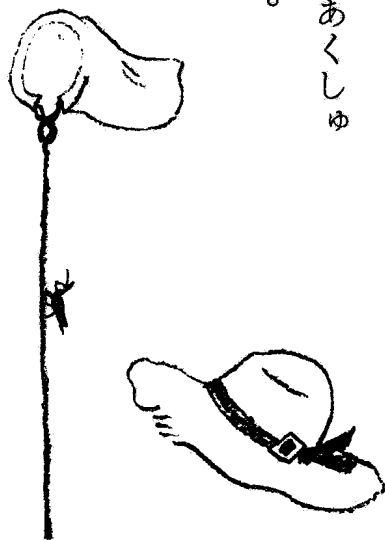
と、思う？

——いらっしやい、まっていたのよ！

そういつて、夏休みとあくしゅする？

リコは三年生。もちろん、「夏休みとあくしゅ

組」です。とくに、ことしはね……。





もくじ

空 そら からおちたハッケン	50
ボタンとおとうさん	45
ハッケン ハッケン のイワシ	37
病院 びょういん のキリ き の木	31
チイリコとパタケン	23
電話 でんわ とテントウムシ	14
ぴかぴかの朝 あさ	6

動物園で 61

きえたブローチ 69

もやの中で 74

「むかし、むかし」 83

お客さまにはお茶を 92

ベビーサークル 100

あたたかいもの 105

ぴかぴかの夕方 114

あとがき 119



筆者の紹介

間所ひさこ（まどころ ひさこ）

一九三八年東京に生まれ、都立墨

田川高等学校卒業。

中学生のころから、日本童話会会員として詩・幼児童話の勉強をはじめ。

昭和三九年度日本童話会賞受賞。

現在、トナカイ村児童文学会同人、鷺島の会、詩と音楽の会、日本児童文学者協会会員。

詩集に、へひさこ詩集などがある。

山本まつ子（やまもと まつこ）

一九二五年北海道函館に生まれる。一水会の富田通雄先生、自由美術のまつやまふみお先生に師事し、現在、絵本とさし絵の仕事で活躍。日本児童出版美術家連盟、童画集団所属。

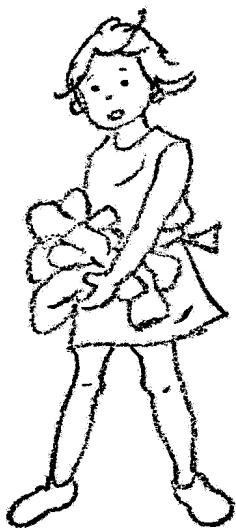


ポプラ社の創作童話

リコはおかあさん

間所ひさこ 作

山本まつ子 絵



ぴかぴかの朝^{あさ}



「リコちゃん、リ、コ。」

おかあさんが、さっきから、たびたびへやをのぞいては、声^{こゑ}をかけていきます。

「おきなくちゃいけません。おきなさい。」

と、いうのではなくて、

「しょうがないわねえ、おねぼうさん……」

そんな感じ^{かんじ}です。目^めをつむっていても、リ

コにはちゃんとわかります。

「リ、コ。」

おかあさんが、七どめぐらいによんだとき、もうとつくに目^めをさましていたリコは、

「はいっ。」

と、いきおいよく、からだをおこしました。

「あ、びっくりした。リコ、おきてたの。」

「ふふ、いちばんはじめっから。」

「なあんだ。」

おかあさんは、まどのカーテンを、さっとひらきました。

「ほら、ほら、ぴかぴかの朝あさですよ。こんないい日ひに、おそくまで
ねてるの、だあれ。」

「きょうは、とくべつよ。夏休なつやすみになったんだもん。」

「そうかな。いいのかな。おとうさんは、いまごろ、汽車きしゃの中なかよ。

おべんとうつくって、おみおくりするんじゃないの、リコお
かあさん……」

「しまった！」

リコは、ベッドから、はねおりました。

おかあさんのおなかの中には、いま、あかちゃんがいるのです。あと、もうすこししたら——八月になったら、そのあかちゃんが、生まれてくるはずでした。

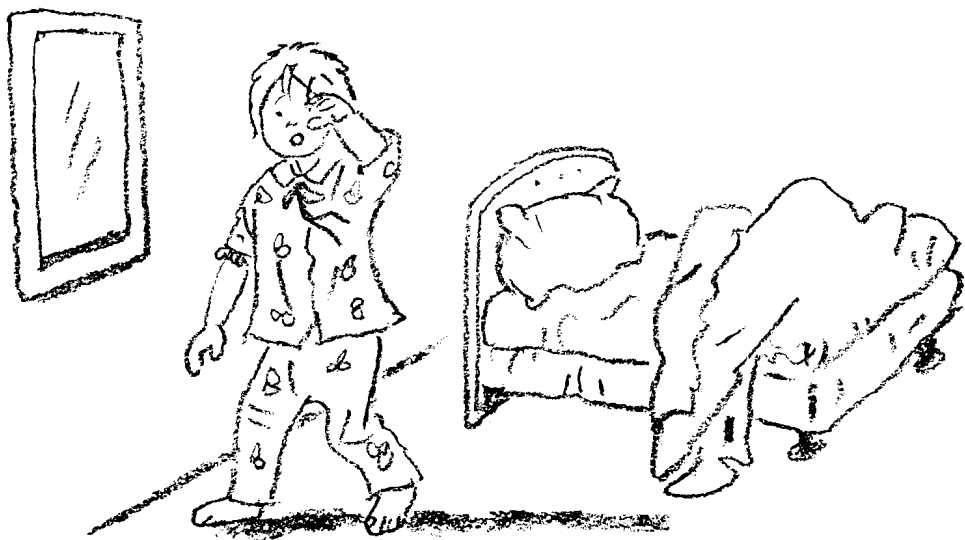
「おかあさんが、病院へ入院したら、るすのあいだは、リコがおかあさん。」

リコと、おかあさんとは、夏休みのずっとまえから、そうやくそくしてありました。

そのれんしゅうを、夏休み第一日めのきょうからはじめるつもりだったのに。

——まず、けさは、早おきをする。

それから、水泳部のがっしゅくに出かけるおとうさんに、おべんとうをつくってあげる。中学のたいそうの先生をしているおとうさんは、おなかがすくでしょうから、うんと大きいおにぎりを五こ。



おとうさんをみおくったあとは、朝あさごは
んの用意ようい。おとうとのハックンのせわ。そ
して、しゅくだいのワークブック。

——と、まあ、リコのよていでは、こう
なっていたのでしたが。

「おとうさん、もういっちゃったのかあ。

朝あさごはんは？」

「あなたのすきな、おとうふのおつゆよ。」

「——じゃ、ハックンは？ まだ、ねてる
んでしょ？」

「い、い、え。おきて、あそんでるわ。で
も、きがえはまだですよ。」

「よかった、まにあって。」

ハックンは、三さい半。本名、サウムラハルヒコです。春生まれの、ハル。おとうさんがサウムラマサヒコですから、そのヒコをわけてもらって、ハルヒコ。

リコのほうは、おかあさんの名まえをもらいました。おかあさんは、サウムラエリコといいます。

「こら、じっとしてなさい、ハックン。」

「やあよ、やあよ……」

ハックンは、ねまきのまま、へやじゅう、おもしろがってにげまわります。リコが、おいかけまわしているところへ、おかあさんがきました。

「どれ、かわりましよ、リコちゃん。」

おかあさんは、くすぐったがるハックンを、かまわずつかまえると、くるりとはだかにしました。シャツをきせ、ズボンをはかせるまでに、一分間とかかりません。



（うまいなあ。さすがに、ほんもののおかあさん……）

すっかりかんしんしているリコに、おかあさんはいうのでした。

「さ、ごはんよ、いらっしゃい。」

けさのおかあさんは、ひだのたくさんついた、もみろのワンピースをきています。えりに、赤い小さなブローチをつけています。

七つの星のもようのある、ナナホシテントウムシのブローチ。おかあさんは、うちにいるときには、いつでもこれをつけているのです。いつだったか、リコに教えてくれましたっけ。

「おとうさんが、おにいさんだったころ、プレゼントしてくれたブローチよ。」

と……。

「おかあさん、そのブローチつけてると、とっても、美人。」

「ま、ありがと。リコがそういつてくれるんだから、きっと、その

とおねね。」

おかあさんは、ごはんをよそいながら、にっこりしました。

「あなたも、もうすぐ、おかあさんやくね。たいへんだろうと思うけど、たのみますよ。」

「だいじょうぶ。まかしといて。」

おかあさんに、そうこたえてから、リコは、こんどはじぶんだけにこっそりと、いつてきかせました。

（——けさは、ねぼうしたけど、あしたから、早^{はや}おきしよう。れんしゅう、れんしゅう）



電話とテントウムシ



おひるすぎに、ハックンが、庭で水あそびをはじめました。ビニールのプールにはいって、じょうきげんです。

「おねえちゃん、みて、みて。ぼく、おしゃかなよ。」
「なんのおさかな？」

「イワシ！」

バッシャン、バッシャン。

ハックンのイワシは、水をたたいて、大あばれ。えんがわでみているリコにも、しぶきをとばします。

「ハックン、だめ。お水かけないで。」

バッシャン、バッシャン。